

salamander in
the circle

第三十八章
混沌・前編



Salamander in the circle

第三十八章の登場人物

ダーヴェ	……	ネウトラ評議会・学術調査団の団長	上級賢者
ヒューダー	……	学術調査団の団員	民族・言語学者
ヤスウ	……	学術調査団の団員	
マミヤ	……	ホシナ族の娘	
バルダリス	……	元・メッサナの総督代理	
コモラ	……	前総督バンテオラの顧問	最高賢者
メンドルブ	……	『化学者の館』の元代表	
シバド	……	ベレオーサ市総督	
ドウル	……	シバドの兄	ベレオーサ家当主
レル・ヴァリス	……	エウメロスの王室付近衛隊長	

これまでの主な登場人物

ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー	世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長	マミヤの父
	ティコ	科学者		オマキ	ホシナの妻	
	ナシル	本部・事務職員		キト・コマ	ホシナ族の男たち	
エウメロス王国	ヘルガ	王女		ゴン	ホシナ族の男	(ヤサカオ族出身)
	カール	王子		サノヒコ	王に仕える役人	
	ヴァリス將軍	レルの父		フツヌシ	王に仕える者	將軍
	ロウナス	国務省の高官		ヤサカオ	ヤサカオ族の族長	
	アンテロ	レルの副官		チドリ	アマセオの妻	
	摂政	亡国王の弟		ハマツ	チドリの養父	
ケストル王国	パウル	国王		タマシギ	ハマツの妻子	
	ウルリク	第三王子		オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者	
	ヘンリク	ウルリクの息子		コタエ	〃	
	ホベオクー	ケストル人の美女		スクナ	〃	
黄金門市	ソルド	闘技場の警備隊長		アマノカガセオ	シトリ族を去った兄弟	
	皇帝	皇帝		メッサナ市	バンテオラ	メッサナ市の総督
	パソネル	ハイスロイの参謀	メルノ		音楽家	
アンベレオ	ソラン	祭祀長	バラム&バランケ		双子のジャガー	バンテオラの部下
			アルチニア	『化学者の館』メンドルブの側近		
			冥界	冥界王	冥界の王	
				ベネトナシュ	死神	
			テクトリ	最下層ミクトランの主		
			ブラトニオ	メッサナを追放された化学者		

目次

混沌・前編

550.

551.

552.

553.

554.

555.

556.

557.

558.

559.

560.

561.

第三十八章のあとがき

これまでのあらすじ

奥付

混沌・前編

550.

バイスロイの死は未だ公表されていない。あまりに突然のことだったからで、やはりあまりに突然だったシパドの婚約発表と結婚披露は……いったいどうなるのだろう。

シパドのことだからなにも考えていないのかもしれない。

水面下では犯人探しが始まっていた。誰がバイスロイを殺したのか。旧メッサナ市民か、それともアンベレオの何者か、か。

封鎖されていた土地に元々住んでいたか滞在中だった者、アンベレオから国王行幸に同行した者、そのどちらかの、誰かだ。まさに密室殺人である。

「婚約発表があった直後から素行の怪しかった者を捕らえよ！ 一人残らず、即刻、捕らえよ！！」

婚約者を失ったシパドの脳内は怒りで沸騰していたが、犯人探しに関しては冴え渡り、行動は迅速で、部下たちへの指図は的確だった。やればできるではないか、研ぎ澄まされた集中力とは恐ろしいなど、とドゥルがひそかに感心したほどだ。が、それもつかの間、次には青ざめることになった。

「素行の怪しかった者の情報を提供せよ！ その者には金一封が下されよう」

情報提供者が殺到したのである。

「おいおい！！ 全員に金一封を出す気か！？」

「ひとりにつき銅貨一枚。なにか問題でも？」

シパドは本気でしれっとしているが、今度は提供者の方が不満を持ち始める。

「なにが金一封だ、おだちんじゃないか」「新総督は弩（級）ケチだ」

まあ、一万円札を期待していたら十円玉だったという感じである。不満より怒りの方が先にたつ。「バカにするな」と。

ドゥルは頭を抱え、

（どっちもどっちだ。シパドにはまともな側近がないし、旧メッサナ市民も地に落ちた。かつての彼らはカネのことをとやかくいう市民性ではなかった）

天を仰ぐ。

（国王陛下が来られているこのような時に！ シパドを御する手綱をこんな形で失うとは！ 新たな火種になることは目にみえておるわ）

（わたしゃいったいどーすりゃいいんだ！！ ああ婿どの！！ かむばあっく！！）

ドゥルのカムバックコールはむなしくこだまするのだった。

551.

しかしドゥルは、一度は手にしかけた黄金門の血を諦めきれなかった。

彼は漏れ聞いた。

『化学者の館』では若さを回復させ老化を遅らせ、寿命を延ばし、肥満や痩身、身長、容貌を調整するなどの研究がされていて、その中には生き物の複製をつくるというものもあるらしい。身体の一部から本体を復元するという、魔法のような技術のことを。もっとも、その第一人者プラトニオはある時不祥事を起こして館を追放され、巨人族増殖に

関わっていたのだったが。

黄金門の血復活の可能性はドゥルの血を滾らせた。つまり、バイスロイのコピーを作ろうというのだ。

いや……ちょっと待て、ドゥルよ……

そうすれば——『化学者の館』があれば——婚姻などという、しち面倒くさい手を使わずとも、ベレオーサの血といくらでも、それもこっそり、混ぜることができるではないか！

われながら、なんという妙案だ！ 物事諦めてはならん、婿どのははわるいが死んでしまったものはしょうがない、我はその先に行く！ 災い転じて福と成す！ これだ！！

妹が妹なら兄も兄である。

ところが、肝心の遺体が消えてしまった。総督府へ移送する手はずを整えるために、ほんのちょっとの間、目を離した隙のできごとだった。シパドは「『消えてしまいました』で済む問題か！！」と雷を落としていたが、もはや、探し出した犯人をどういたぶろうかという問題で頭がいっぱいだった。彼女の辞書には良人の死に関する項目は一行もなかった。悼むことも偲ぶことも。シパドはどこまでも攻撃的にできていたのだ。兄が兄なら妹も妹である。

黄金門の血にはいろいろと不思議なことが起こる。ドゥルが諦められなかったのも無理はない。しかし、利己的にして邪まな目的のために使われることを、金星は良しとし

なかった。

552.

ルカティマの遺跡に新たな集団が到着した。大熊座流星群と共にやってくる神々の、その化身たちである。そして五十二年に一度の大祭に捧げられる“主賓”たちだ。

彼らは戦争捕虜であったり重罪人だったりする。男も女も混ざっている。彼らは自分らが化身にして供物であることを知らない。それどころか、此度の大祭に合わせて開放されるのだと聞かされている。

自由の身となる前に、彼らには豪華な衣装が与えられ、男神や女神に扮し、人々の前に姿を現す。人々に神々の偉大な恩恵を示すためである。戦争捕虜も重罪人をも赦し、開放する神々の偉大さを人々は声をかぎりに称賛し、喝采するのだ。

連日繰り広げられてきた数々のイベントの興奮もこの『化身たちのパレード』で最高潮に達する。

化身たち自身もアンベレオから来た観光客たちも長い期間に与えられてきた麻薬によって、酩酊し、感覚はすっかり麻痺している。もはや夢心地、というよりも、夢幻のなかをさまよっているようだ。

旧メッサナ市民とイベントに召しだされた外国人・旅行者だけが素面だった。アンベレオは旧メッサナとの間に異様なほど明確に、線を引いていた。なぜなら——大祭の最後に行われるメインイベントを素面の人間に見せつけたかったからだ。

アンベレオはどこまでもメッサナが憎かったのである。

旧メッサナ総督家のパルダリスは、従来アンベレオの首都で行われてきた『神々の再来』祭りを知ってはいたが、アンベレオ経済界が商業用に作り出したイベントだろうと考えていたので、まるで興味をもっていなかった。彼だけでなく、旧メッサナの人間はおそらく一人残らずそういう認識だった。だから、そのあやしげな祭りが大々的に“われわれの街”で行われると知って真っ先に感じたのは、「迷惑だ」、という、それだけで、ただひたすら「なにしろ早く過ぎ去ってほしい」と思っていたあたりはドゥルと同じ心境だった。祭りが過ぎ去ったところで元の生活に戻れるわけではなかったのだが。

そんなわけで、わけの分からない祭りに連日連夜振り回されてへとへとになっているパルダリスのもとへ突如あの女がやってきたものだから、彼は腰を抜かさんばかりに驚いた。遠目に拝顔奉ったことはあるが、顔を合わせたのは初めてである。前総督代理と現職とは、現職が一方的に発行する通達だけの繋がりしか、なかったのだった。

アンベレオ人特有の金髪に金色の瞳、金色の肌。相手がどんな人間かさんざん耳に入っていれば、たとえ女神のように美しくともなんの感慨もわからない。細面の顔に鋭い目つき、薄い唇、高く張り出した胸や細くくびれた腰、長い手足の瘦身は——たとえようもなく——陰険そのものだ、というのがパルダリスの受けた第一印象だった。相手の女が飾り気のない真っ黒な衣装を着ていたせいかもしれない。（初めて他人の屋敷を訪問する格好ではないだろうよ）とパルダリスはこっそり思わずにいられなかった。

シパドにしたところで、前の総督代理の屋敷を訪問するという気はさらさらなかった。犯罪者を求めて来たのである。前置きも自己紹介もなく、彼女はいきなり言った。「あの女はどこだ」

パルダリスは面喰った。この女がこの街の新しい統治者だというのか。

「あの女はどこかと訊いている」

「――誰のことでしょうな」

さんざん間をおいてからパルダリスはゆっくりと言った。この女が何をしに来たのかわからないが、とにかくコモラとメンドルプ、二名の老人には逃げ隠れてもらう時間が必要だった。

「マミヤという名の外国人だ。以前この屋敷にいたということはわかっている。とぼけても無駄だぞ」

「マミヤ？ たしかに、いつか滞在していたが、ある時出かけて行ったきり、帰ってこない。いったいどこへ行ってしまったものやら」

とにかく事実だけを並べておこうとパルダリスは考えた。マミヤは金星神殿へ祈祷に出かけてから何事かにかまきこまれたらしいのだが、それがなんなのか彼にもさっぱりわからないのだ。それで彼はつけ加えた。「こちらが知りたいくらいですよ」、と。

554.

「あの女は死刑判決を受けていた」

またもやシパドはいきなり言った。彼女の言動には間というものがなく、顔に表情というものがない。そのために彼女のすること成すこと、言わんとすること、思っていること考えていること、傍らの人間にはまるで見当がつかなかった。

『死刑判決』という言葉が、なんの情報も持たない相手にどれだけ衝撃を与えるかとい

う想像力も、この女は持ち合わせていなかった。だからパルダリスの驚愕に歪んだ顔を見てもなんとも思わなかった。

「なんと言われた！！ 死刑——死刑とは——マミヤが——なぜ——あの娘が何をした、いったいなんの罪で—— 人を殺めたのか、それとも放火か——」

「その方が知らずともよいことだ」

「そうはいかぬ！」パルダリスはよろめく足を踏みしめ、揺らぐ心を立て直そうと踏ん張った。「知らねばならない！ マミヤは当局に捕らえられたのだな？ なぜ、どのような罪科で死刑判決を受けるにいたったのだ、なぜだ、総督府は住民の疑問に答える義務があろう！！」

「その方」

きろり、と目が動いた。機械仕掛けの人形のような気味の悪い動き。「総督府への批判は重罪だぞ」

この女は危険だ、パルダリスは直感した。そして必死に考えた。この女を怒らせてはならない、怒らせずに、なんとかして情報を引き出すのだ。

「批判ではない！ 知りたいだけだ！ そのために手続きが必要なら、従おう」

「だから、知る必要はないと言っている。なにが罪で、なにが罪でないか。どんな罰が下されるか。それはあたしが決めるからだ。つまり、あたしが法律だ」

目まいを覚えてパルダリスは何かにつかまろうとする。ある日突然連れ去られて処刑された前総督にして姉、パンテオラの面影が脳裏をかすめた。この女シパドは自分が何を言っているのかわかっているのか。あまりに馬鹿げていて、あまりに堂々としてい

た。あまりに自信に満ちた態度に、こちらの方が間違っているのではないかという思いが沸いてくる始末だ。悪夢のさざ波がひたひたと足元を洗い始めている。

それでも彼は懸命に考えた。どんなに馬鹿げていてもこの女が権力を握っているのは事実。権力者との邂逅を無にするわけにはいかなかった。

555.

「な、なるほど……いや、その、つい先日、総督府から通達が出されましたな。ベレオーサ市において裁かれた犯罪者については恩赦が行われるという……」

なんとか糸口を見つけようと懸命に口を動かして、はたと気がついた。その通達を見たときはダーヴェとヒューダーのことしか頭になかったのだったが、この女が自ら裁いたというならマミヤも恩赦の該当者なのではないか？（だから——通達と同時にマミヤは釈放され、この女の手の届かないところへ——？）

「恩赦は取りやめだ。刑の執行は予定通り行われる。だが手違いで釈放されてしまった」

（それで探しているというわけか！　しかし恩赦を取りやめ？　そんなバカな——）

パルダリスのあ然とした顔を前に、シパドの内では兄ドゥルとのやり取りが回想されていた。

＊

「恩赦を取りやめるだと！？　今さら！？　バカな！！　おまえ、それがどんなに残酷なことかわかっとなるのか！！」

ドゥルは血相を変え、卓に拳を叩きつけ、唾を飛ばして怒鳴った。

シパドが総督に就任してからわずかの間に投獄された者はかなりの人数を数えていた。なかにはネウトラ評議会の関係者のように深刻な罪を負っていたものもいたが——評議会関係者は最初から極刑と決まっていたので裁判もなにも行われなかったし、シパドにはなんの関心もなかった——、おおかたはシパドのほとんど気まぐれによって囚われた者たちだった。シパドよりはいくらかまともな感覚の持ち主であるドゥルとしては、そんな者たちの血を見るのは忍びなく、恩赦が決定された時には大喜びして、即座に部下を呼びつけて囚人全員を釈放するよう命じてしまった。シパドとしても止める理由はなかった。だって……愛（執着）の限りを尽くしたバイスロイとの結婚と引き換えなのだから。兄のすることを黙ってみていた。囚人釈放の片棒を担いだ自覚は、一応持ち合わせていたのである。

しかしバイスロイは殺された。

シパドは冷静に反論した。

「兄上、残酷な目に遭わされたのはあたしのほうだ」

556.

このときになってパルダリスはようやく気がついた。シパドの黒意、いや黒衣が意味するところに。（——まさか——）

シパドが引き連れてきた部下たちになにか合図する。と、彼らはいっせいに動き出した。家探しをするつもりだ。シパドは顎を引き、探るような上目遣いでパルダリスを見て言った。「隠し立てをすると、ためにならぬぞ」

パルダリスは額に噴き出る汗をぬぐって肩をすくめ、「なにも隠してはおらぬ。好きなだけ探すがいい」ついでのように尋ねた。「ときに総督閣下、恩赦取りやめの理由をうかがってよろしいかな」

はたして、シパドは目をつりあげた。ぎりっ、と音がしたようだった。
「理由があるから取りやめた。それ以上のことを、その方は知らなくてよい」

もしかしてこの若い女はひどくわかりやすい人間かもしれん。パルダリスは思う。ベレオーサ家の慶事にストップがかかった。ゆえに恩赦も無しになったのだ。

「マミヤという娘には男がいただろう」

「……はあ？」

「芸術家の男だ。黒髪に緑の目の」

「その男が？ マミヤの？ さあ。私は知らん

(やはりカギはバイスロイ氏か！ しかしマミヤのお相手は彼じゃない。いったいなんだったってまた。いや、ちょっと待て！ バイスロイ氏と婚約していたがダメになったと！？ するとバイスロイ氏は！？)」

わからないことだらけでパルダリスは身もだえせんばかりだ。まったくシパドが相手ではらちが明かないこと、このうえない。しかし自制心に欠けるシパドには自らすべてを……なんでもかんでも……詳らかにするという美点があった。

「あの娘はバイスロイに執着していたのだ！ あまりの疎ましさに決着をつけようと、バイスロイはマミヤをボムソワール邸跡におびき出し、そこで娘の仲間から返り討ちに遭ったのだ！！」

しだいに激昂していくシパドをパルダリスはぼかんと口を半開きにして見ていた。バイスロイもマミヤも知っている彼には、どう曲解すればそんな絵空事が描けるのかという思いだ。この女は総督の器では断じてない。控えめに言って、狂人だ。

557.

シパド一行が去った後のパルダリス邸はまるで嵐に遭ったような有様だった。娘一人を探すという名目で広大な屋敷の上から下まで手当たり次第に物が動かされていた。手ごろな大きさの美術品は無くなっていたし、高い天井から吊られた見事な金紗の織物などは、手がつけれなかったのだろう、これ見よがしに刃物で切られていた。ちょうど、パンテオラが突然踏み込んできたアンベレオ兵に連れ去られた後の総督府と同じような状態だった。もしかしたら同じ部隊の仕業かもしれない。

「ひでえ——」

空から庭園に降り立ち、“裏”から屋敷に戻って来たヤスウは一言つぶやいたきり声を失った。やりたい放題のシパド一行が玄関から引き揚げて行ったのと入れ違いだった。屋敷に人の気配はなく静まり返っている。ヤスウは声もなく手当たり次第に歩きまわり、きょろきょろと見回し、目で探す。

パルダリスさま……コモラのじいさん……メンドルプ先生……

ふと名前を呼ばれた気がした。立ち止まって耳をすますと、「ヤスウ!」。やはりそうだ、レル・ヴァリスだ、あいつが呼んでる。——玄関の方だ——

ヤスウは気持ちの悪い動悸を抱えて無残に荒らされた邸内を走った。いたるところにモノが転がっていて幾度も転びそうになった。

「ヤスウ! こっちだ!」

象牙色を基調にした調度品の間でレル・ヴァリスの紺藍の背中が見えた。床にうずくまるようにしてなにかしている。

「どうした、レ——」言いかけて絶句する。「——パルダリスさま！！」邸内の静寂にその声が吸い込まれていく。床は血の海。

「剣で斬りつけられたようだ」

「おいおめえなにしてるんだ」

「手首を切り落とされていた。それをくっつけている」

「はあ！？」

「コタエさまがケガ人をこうやって直していた。見よう見まねだけど、僕にもできそうな気がする」

「み、見よう見まねでちょん切れた手首がくつつくのかよ」

ひくいうめき声。

「パ、パルダリスさま！ 気がつかれた！ 俺ですよ、ヤスウ、わかりますか！？」

(——ヤスウ？ やつらは——行ってしまっただろうか——)

「誰もいませんよ。やつらってだれです？ だれがこんな——むごいことを！」

(——新総督。シパドとその一味。マミヤを探しに来たのだ。マミヤがここにいたことがあると、密告があったと、言っていた——)

「マミヤを！？」「密告！？」

ヤスウは思わずレル・ヴァリスの目線を求めた。レルもまた大きなショックを受けていた。パルダリスがうっすらと目を開ける。

(貴公は——どなたかな)

「エウメロスのレル・ヴァリスという者です。お見知りおきを」

(私は生きているのか。信じられん。やつらはマミヤがここにいないと知って引き上げようとした。シパドは物も言わずいきなり剣を抜き——もうダメだと思っ——)

「大丈夫、多少出血していますがすぐに回復するでしょう。お気をたしかに」

(ありがとう。恩にきる。ヴァリスどの、ヤスウ、ふたりとも聞いてくれ、恐ろしいこ

とが起こっている。バイスロイ氏が亡くなった)

558.

(彼はベレオーサ・シパドと婚約し、その後、何者かに殺された。誰が、何故、シパドにもわかっていないのだ。そしてあろうことか、シパドは、マミヤが犯人だと思いこんでいる)

「な、なんでそうなるんで!？」

(シパドの頭の中では、マミヤの方がバイスロイ氏に執着し、バイスロイ氏はそれを疎み、結婚前に始末をつけようと彼女を呼び出したところ、逆に彼女の仲間に返り討ちにあったのだという、そういうシナリオになっている)

「なんだそれ? なにがどうすりゃそうなるんでい!」

「思い込みが激しいんだな」

「そんなナマやさしいもんじゃねえだろ、イカれてるってんだ」

ケガの痛み以上に、前総督家の矜持がパルダリスの心身を震わせていた。

(婚約によって決定した恩赦を、婚約者が死んだから撤回するというのだ。そのような重大なことを簡単に覆す。あの女は人の上に立ってはならぬ人間だ、私は——あの女が許せぬ)

次々と明かされる事実にヤスウもレルも頭がついていかない。ふたりは同時に口々に叫んだ。「恩赦を撤回!？」「す、すると、ダーヴェ先生たちは!？」

(マミヤが追い回されているところを見ると、総督府に捕らえられていた者たちは既に
釈放されたのだ。だが釈放後のことは私にもわからぬ)

559.

パルダリス邸には美術品の地下保管庫がある。べつに隠してあるわけではなく、屋敷に置き切れない美術品や、人工照明のなかで映えるタイプの作品群が整然と並んでいて、地下美術館である。当主の許可を得れば誰でも入ることができる。シパド一行がこの存在に気づかなかったのは、単に当主パルダリスに尋ねる、許可をとるという手続きをしなかつただけのことである。

また、存在を知っているパルダリス邸スタッフや芸術家たちの口にのぼらなかつたのは、収められている品々があまりに見事なものぞろいだったからだろうと、パルダリスは思った。実際、彼らは暗黙のうちに美術品を守つたのだった。

そしてじつは……この広大な地下美術館は総督府に繋がっていた。パンテオラ自身は総督府の一面に住まいを持っていたが、パルダリスは仕事で出向く際はこの美術館を通勤路にしていたのである。仕事も目も楽しめる、一石二鳥のために。

シパド一行の急襲に遭つた時、コモラとメンドルプの二老人はこの美術館に身を隠した。外部の様子が分かりづらくなるのが難点だったが、身の安全には替えられなかつた。そして老人たちは、シパドが血眼になって探しているマミヤと鉢合わせしたのだった。

「マミヤ！　ダーヴェェにヒューダーも！？　きみらはいっしょだったのか！」

「コモラさん！　メンドルプ先生！」

彼らが互いの無事と再会を喜び合っているところへヤスウたち三人がやって来た。パルダリスは大ケガをした左腕を肩から布で吊っていたがそろそろと自力で歩けるまでに

回復していた。こうしてコモラ、メンドルプ、マミヤ、ダーヴェ、ヒューダー、ヤスウ、レル・ヴァリス、パルダリス、総勢八名が集まった。

560.

閑静な住宅地にあって植物と石に囲まれたパルダリス邸にも大通りの喧騒が聞こえてくる。たいへんな騒ぎだ。音楽、人々の歓声。音楽は自分らがナーヴァスになっているというようなことではなく、バイスロイがなんとなく感じ取っていたように、もはや旧メッサナ市民らが知っていた音楽ではなくなっている。シパドたちアンベレオ本国からやって来た人々が楽器の調律を変えてしまったからだ。ごく普通の人間の耳にはわからないが、心身が受け取る音の微妙な変化は旧メッサナ市民を確実に蝕んでいた。アンベレオ製の麻薬を盛られていようがまいが、耳から入ってくる音楽、その波動に対処する術はなかった。

「俺たちにできることはもう、なにもねえんですか」

ヤスウの声にも、問いにも、苛立ちがあった。

ヤスウの目線の先にいるダーヴェは回答を迫られて窮し、ヒューダーは考えていた。（その問いに答えはないのだ）、と。（それともお前はヤスウ、リーダーの言質が欲しいのか。ダーヴェもオレも、すでに死んだ人間なんだぞ。死んだ人間に何を求める？ おまえにはひとりで生きていく覚悟がついていなかったというのか。……情けない！）

レル・ヴァリスは床に目を落としたままパルダリスのケガをした左腕に手を添えている。間断なくエネルギーを注入し、回復しようとする細胞の働きを助けているのだ。

（コタエは治療についてそう話していた）

彼にはその場の人間たちの考えていることが手に取るようにわかっていた。高圧の精神エネルギーの持ち主コタエに触発されて身についてしまった能力だった。

コモラはパンテオラ総督との栄光に満ちた思い出に浸っているし、メンドルプの頭の中は数式と記号だらけで、“アルチニアのなぞなぞ”以上に複雑怪奇だ。それでも皆が、異常を感じているのがいやでも感じられる。そして、マミヤは……

561.

マミヤは目を開けたまま夢を見ていた。わけの分からない嫌疑で捕らえられ、目の前で友人のようなジャガーをまっぶたつにされ、裁判もなく一方的に死刑を宣された。不条理の嵐に弄ばれて、もはや怒りも絶望も何も感じない、独房の中で。眠るたびに、幾度も、マミヤはその世界へといざなわれた。その夢が今マミヤを訪れていた。

*

奇妙な言葉を話す人々が、奇妙な装束をまとって、せかせかとあるいはゆったりと、行き交っている。

天井は高く、空恐ろしいほど高く、四囲の壁の前の広い通路をあるく人々、また斜め下への階段に乗ってそのまま運ばれていく人々、さらにその下へ向かう移動階段……
いったい何階層あるのか……どこもかしこも人だらけだ。メッサナに来てからもこんなにたくさんの人々を目にしたことがない。

ある人は開放的で、ある人は緊張気味で、低いさんざめきに溢れている。

ぼんやりと歩いていると正面から来た人とぶつかりそうになった。その初老の婦人はマミヤに向かって微笑んで何事か言い、横に避けて行ってしまった。マミヤ自身もごく

自然に笑顔になって、さらりと何か言った。その言葉にわけもなく幸福な気分を彼女は感じていた。ぼんやりしていた気分が焦点が合ってきたというか、目が覚めたようだった。

人の中を歩いていくと、広い場所に出た。壁の一面が透明で、外の風景が見えるのだ。そこにある物は……知ってる、航空機だわ……

ああ、とマミヤは得心する。ここにいる大勢の人たちはあの航空機に乗ろうとしてるんだ……

航空機はひっきりなしに飛び立ち、また、やってくる。人々と物とが、そうやって行き交っている。離着陸の際、凄まじい音が発せられ、透明な壁を震わせる。マミヤが知っている航空機も音を発してはいたが、こんな爆音ではなかった。彼女はそこまでは知らなかったが、動力源の違いのためである。

マミヤは問う。あたしはここで何をしているの？

透明な壁の前で外を眺めている一団の中に、知っている人がいた。その人が振り返り、マミヤを見た。真っ黒な瞳。黒曜石みたい、とマミヤは思う。

その人は、「どうかしたのか？」と聞いてきた。別に心配しているようでもない。黒い目も、口調も落ち着いている。

マミヤは首を横に振って言った。「ううん、忘れ物がないか、思い返していただい
よ」

「大事だな。この前はパスポートを忘れたからな」

真っ黒な瞳に真っ黒な髪はその若い男はひとりではなかった。左の腕に幼児を抱えていた。その幼児がマミヤを見、男を見上げてたどたどしく言う。

「ママ、だいじなもの、わすれたの？」

「忘れ物はないわよ」

「ぼくのことも？」 幼児の瞳も真っ黒。男にそっくりだ。ママヤは手を延ばして幼児の頬をつつく。

「わすれてません」

幼児は心底、うれしそうな顔を見せた。

「さ、ママが抱っこしましょうか？」

「ううん」、と幼児は男にしがみついた。

「まー、ふたりは仲良しなのねー」

「うん。ぼくたち約束したから」

「どんな約束？」

「パパはぼくに名前をつけてくれる。ぼくはそれを受け取る。それからずっと仲良く暮らすんだ」

回らない口で、いっしょうけんめい言う。

「それはうらやましいわ」 ママヤはちょっと拗ねる。

「ママとも約束したよ、わすれちゃったの？ ママはぼくを産んでくれるんだよ」

第三十八章 『混沌・前編』

第三十九章へ続く

第三十八章のあとがき

No.551にある『～若さを回復させ老化を遅らせ、寿命を延ばし、肥満や痩身、身長、容貌を調整する～等々』は、フランシス・ベーコン(1561年～1626年)のユートピア小説『ニュー・アトランティス』に登場する『ソロモンの家』で研究されていた事柄のほんの一例。『ソロモンの家』の目的は、諸原因と万物の隠れたる動きに関する知識を探り、人間の君臨する領域を広げ、可能なことをすべて実現させることにある(本書より)

まあ、『ソロモンの家』については面白いことが多々書かれています。発電の概念とかホログラム、放射線、水中船の研究とかもしていたと。エリザベス一世の時代に生きていた人の空想にしては…百年も二百年も三百年も時代を先取りしていた観。この本、最初は『ニュー・アトランティス』というタイトルじゃなかった。『The Land of the Rosicrucians (薔薇十字会員の土地)』というものでした。薔薇十字会は『化学の結婚』(アルチニアのなぞなぞはこの中にでてきます)にも通じます。いうまでもございませんがメンドルプさんが代表する『化学者の館』のモデルです。

さて、次の章が最後となりそうですが…最近、夢の中で、この場面の言い回しはこう？ いやこういう方がいい？ とこねくり回していることがある。『宇宙船七月号』を考えてた時と似た状態。まあ、目が覚めるとほとんど思い出せない。こねくり回した疲労感だけがのこっているのがあった。

2024年5月8日 記

これまでのあらすじ

第一部

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可と依頼によるものだった。

ネウトラ評議会・学術調査団の団長ダーヴェとヒューダーとがホシナ族のもとへやって来た。絶滅危惧種・巨人族の調査のためである。しかし巨人族の姿は見えず、ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤが行方不明になる。ダーヴェの痕跡を追って島を離れた団員ヒューダーとヤスウは移動中に緊急事態信号を捉えた。ヒューダーは信号発信元のエウメロス王国へ、ヤスウはダーヴェを追ってケストル王国へ向かう。

エウメロス王国は巨人族の大群に襲撃されていた。ヒューダーの説得で国王は城を棄てて避難、ケストル王国へ赴いたまま帰国できずにいる王女ヘルガを迎えに、近衛隊長レルはヒューダーと共にケストル王国へ。

エウメロスとの国境付近にはケストルが密かに造った離宮と闘技場があった。そこにはヘルガ王女もマミヤも捕らえられていた。ヒューダーたちは評議会の人間として離宮に入り込むが、ひとりの少年を密入国させたとして捕らえられてしまう。

成り行きからヒューダーは少年にイリチャという名を与え、闘技場で戦うことになる。

第二部

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチャを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。行き場を失い、郊外の湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。

同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を離れてメッサナを目指していた。

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理パルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

第三部

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ある日、アマセオの妻に三つ子が生まれたという知らせが届いた。自身も三つ子であるアマセオは困惑する。三つ子は王位継承の証しであり、その存在は間違いなく混乱をもたらすからだ。

妻子に逢うため帰郷したアマセオは、妻の兄タマシギと語りあううち、タマシギが秘める野望を知る。機織りのシトリ族の立場を盤石なものにしたいがために、タマシギは禁忌に手を染めていたのだ。アマセオが己の前に立ちほだかろうとしているのを感じたタマシギは政庁のフツヌシに訴え出る。フツヌシは王の兵士であるアマセオがホシナ族に接近していることをかねてより懸念していた。そんな折、三つ子が怪鳥にさらわれるという事件が。怪鳥の正体はアマセオの弟だった。生後すぐに間引きされた弟カガセオは、手をかけたタマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のために手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

黒曜石事業の権利を拡大解釈したとの理由で、フツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。そこには王位継承が絡んだ陰謀が大きな影を落としていた。現王と深い関係にあるホシナ族、ホシナ族に近づくアマセオは陰謀と戦いに巻き込まれたのだった。

ホシナとアマセオは旧知のヤサカオの助力を得、フツヌシ軍を迎え撃つ。

第四部

母国エウメロスへ帰還した王女ヘルガを待っていたのは、黄金門市の皇帝。彼らもまた巨人族襲撃によって故郷を失っていたが、その際エウメロスの国土へ直行したのは、そこには太古の地下都市・『トゥランの七つの洞窟』への入り口があったからだった。

巨人族の跳梁に、地上での生活を諦めねばならなくなったエウメロスと黄金門の人々は地上への出入り口を閉じ、地下都市へ向けて地下道掘削に取りかかる。

同じころ、ネウトラ評議会は巨人族を殲滅させるべく原子爆弾の製造に乗り出そうとしてメッサナの化学者団と決裂する。爆弾製造の協力者として名乗り出た評議会西支部のコパーン博士は、製造工程の最後に使う素材、ブルー・マーキュリーを無人偵察機に搭載して送り出すが、偵察機はケストル王国北方の氷河地帯で制御不能に陥る。

ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっている皇帝の息子バイスロイ救出に向かう。

世界の果ての島からホシナ族に同行してきたスクナは旧知のヘルガと合流し、ケストル王国へ向かい、氷河決壊に巻き込まれる。

第五部

太古の偉大な種族は世界中を結ぶ転送システムなるものを構築していた。そのステーションのひとつがケストル闘技場の地下にあり、ヘルガたちをいずこかへ転送する。彼らが到着したのは冥界最下層ミクトランであり、迎えたのは行方不明になっていたネウトラ評議会のダーヴェェだった。

ダーヴェェは仲間のヒューダー、イリチャと共に巨人族を探索してミクトランへとたどり着いていたが、あまりに広大複雑な異次元空間での探索は遅々として進んでいなかった。しかしヘルガ、スク

ナ、バイスロイが合流したことによってメッサナで起こった音楽生迫害事件について情報交換が行われる。迫害されたメルノとバイスロイとは深い繋がりがあったのだ。メルノが今はミツハと名乗り、その外見がイリチャに酷似していると知ったヒューダーは困惑する。かつて水精霊から生まれた子が名を取り上げられ無力な水棲生物に姿を変えられたという。『ミツハ』とは水精霊を意味するのだ。世界の果ての島からついてきたイモリに、イリチャ=槍と名づけたヒューダーだったが、彼に戦いを宿命づけてしまったかもしれないことに責任を感じる。スクナとヘルガとはミクトラン脱出を敢行、そして、ミクトランの怪物が大挙して襲い来るさ中、イリチャはミクトランの女王テクトリの手に落ち、巨人族生成の現場を見せられる。

第六部

テクトリらの前に突然現れた男は、底知れない力でテクトリとベネトナシュの巨人族増殖計画を簡単に握りつぶしてしまった。イリチャの懇願によってダーヴェたちは地上、メッサナへ送られ、イリチャは連れ去られてしまう。事態のあまりの急転はダーヴェたちに無力感と敗北感とをもたらし、メッサナ住民と苦楽を共にしてきたジャガーはアンベレオ王国の命令で全頭が捕獲されることに。ヒューダーはマミヤと再会し、つかの間の安らぎを得る。

そんな折、放火されたメルノの実家の前でバイスロイはひとりの女に出会う。ベレオーサ・シパド。彼女はアンベレオ本国から乗り込んできた先遣隊長で、バイスロイが彫刻を得意とする芸術家だという話を真に受け、彼にメッサナ奪還記念硬貨を造らせるため、アンベレオ王都へと送る。記念硬貨に刻まれるモデルとは、神の代理人たるイリチャだった。

メッサナ市はベレオーサ市と改名され、新総督となったシパドはバイスロイに求婚するが、断られる。このことに逆上したシパドは意趣返しに次々と恐ろしいことを企み、全市民を恐怖に陥れるのだった。

奥付

Salamander in the circle

第三十八章 混沌・前編

2024年5月10日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
